

多様性学べる親日国 留学や研修続々

マレーシアへ教育旅

子供の教育にマレーシアへGO! 東京芸大卒でタレントとして活動していた優木まおみさんがこの夏、母子で教育移住したことは象徴的だが、日本からの留学・修学・研修旅行先として注目が高まっている。▽多民族・多宗教国家で多様性社会が学べる▽英語が共通語として普及▽滞在費が手頃▽親日的で穏やかな国民性...などが要因という。もとより日本からのロングステイ希望の国・地域としては年連続1位(ロングステイ財団、昨年発表調査)の人気がある。改めて魅力を探ってみた。

マレー系(イスラム教) 58%、中華系(仏教) 23%、インド系(ヒンズー教)

近ごろ都に流行るもの

7%、その他先住民族(さまざまな宗教)で構成する国家。「固有のカルチャーをお互いに尊重し、融合もして、争わず平和に団結している。われわれ国民が自然に築いてきた精神と文化が近年、多様性という意味で注目されている」とマレーシア政府観光局のシャリザ・アズミ日本局長。マレー系の寛容なイスラム教徒でスカートをかぶるかどうかは自由。彼女は肩にかかる髪をなびかせている。政府は来年を「観光年」と定め、日本の学校旅行誘致にも力を入れる。

「カンボン(田舎)ステイといって、自然の中で伝統的な暮らしを体験・交流するプログラムがある。SDGs(持続可能な開発目標)教育の観点からも、問い合わせが増えています」

都内の明治大付属中野中学・高等学校では6月にマレーシアの研修旅行を実施した。「環境問題に対しても日本とは違

う視点がある。ボルネオ島の熱帯林の村で地元の方々、高校生と交流。伝統的なタシパク源である昆虫を食べたり、踊ったり、全く違う価値観に触れて生徒たちがいきいきしていた」と引率した清水孝校長。従来の旅先は欧米先進国のみだったが今回初めてアジアを選び、研修後何人かが「マレーシアの人はみんな優しい」と答えた。「日本へのまなざしを敏感に感じたようです」

親日的な国で学ぶことの安心感。この夏100歳で来日したマハティール元首相が、日本の近代化を手本とした「ルック・イースト政策」の影響も大きいようだ。

日本からの修学旅行だけでも新型コロナウイルス禍前の平成

30年で193校に上り、現在調べた。統計はないが、子供の広がっているという。

1企業役員(女性35)は(14)を首都クアラルンプールにきた。「(正英領)英国起業家精神を学べる、インタースクールがあり、周辺諸国や学費や生活費が安いことがた。娘は日本では不登校だった。生回けのビジネスコンペに挑秀を受賞するなど探求心が強ら半月。同級生との写真や充実した便りにほっとしている。

彫りの深い顔、浅い顔...立ちと衣装のタナサーが、民族舞踊の動きを織り交ぜながら群舞している。「これは国です」とシャリザ局長。上博のマレーシア館で披露された。心をつかみにされた。

それぞれの宗教で忌避するゆえの、多様な美食文化。西園で8月10日放送、読売番組「す・まだん」では100人による海外パトリック1位にも輝いた。

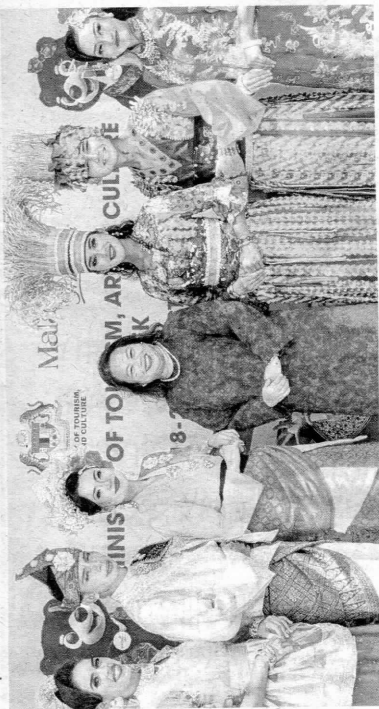
会場に行かなくても本場。東京・JR水道橋駅で、ル1階に4月開店した「マコヒティアム」では、コで炊いた飯と辛いおかずに乗せたナシシマツ(121ミリーなエビだしの麺料理

00円)屋台飯の定番(1100円)などがあり、郷

現地の老舗食品会社「展開するレストランで創ルトパウチ技術を日本からた。そこからの縁です」と

口は広がる多彩なつまみ

レーシアか。



多民族のタナサーに囲まれる、マレーシア政府観光局のシャリザ・アズミ日本局長(中央) 大阪市の大阪・関西万博会場



ナシシマツ、ラウサ、パイ生地風のパンのロティチャナヤなど料理も多様。バラの飲料や定番のミロも

東京都千代田区の「マレーカンボン コヒティアム」